

やま だ さる わたり

山田申渡遺跡Ⅰ・Ⅱ

— 平成4～5年度緊急発掘調査報告書 —

1994.3

静岡県袋井市教育委員会

例 言

1. 本書は、静岡県袋井市山田中渡882の1他で実施した山田中渡遺跡の緊急発掘調査報告書である。遺跡の調査期間は土地所有者の都合により第1次・第2次調査に分かれたが本書ではこれをまとめて報告する。この遺跡は従来は八王子神社裏遺跡の名称で登録されていたが、今回の発掘調査を機会に遺跡名決定の一般的手法で字名を取って「山田中渡遺跡」とする。
(第1次調査) 平成4(1992)年7月1日～平成5(1993)3月31日
(第2次調査) 平成5(1993)年5月1日～平成5(1993)3月31日
2. 発掘調査は山田中渡遺跡内での土石採集計画に伴い全額起内者(土地所有者)負担で袋井市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、永井義博(袋井市教育委員会)が調査担当した。
4. 資料整理・報告書作成も永井が実施した。
5. 発掘調査に際して、土地所有者を代表して中島一夫氏(袋井市山田878の2)にはたいへんお世話になった。ここに記して感謝したい。
6. 本調査に関する事務は袋井市教育委員会社会教育課職員が行った。
7. 調査資料はすべて袋井市教育委員会が保管している。

目 次

第1章 発掘調査に至る経過	1
第2章 調 査 経 過	1
第3章 調 査 体 制	2
第4章 調 査 方 法	2
第5章 地理的環境・歴史的環境	4
第6章 遺 跡 の 概 要	7
第7章 まとめにかえて	18

第1章 調査にいたる経過

本発掘調査に至る経過は、平成3年度に静岡県教育委員会の委嘱を受けている県の文化財パトロール員により袋井市教育委員会宛てに袋井市山田地内での上石採集地が静岡県遺跡地図に示されている「八王子神社裏遺跡」であるとの指摘を受けた。袋井市教育委員会では、静岡県教育委員会とも人至急に相談をし、現地を確認した。この事業は袋井市内の業者が、地元の土地所有者数人に依頼されて土石採集をしているということで袋井市教育委員会は土地所有者の代表格である中島一夫氏と相談した結果、土石採集事業を一時中断して現地の試掘調査を行うことで合意にいたった。袋井市教育委員会では平成3年10月14日、松井一明主任学芸員を現地に派遣して試掘調査を行い対象地が古墳時代の集落跡であることが判明した。そこで、教育委員会と土地所有者は再度の協議の結果、平成4年度に約1,000㎡について発掘調査を行うこととした。また、平成4年度の発掘調査中に土地所有者よりさらに東側の土地約1,000㎡の追加を依頼され、それについては平成5年度に実施することとなった。

第2章 調査経過

平成4年7月21日 発掘器材を前任地の土橋遺跡（コジマヤ）より現場に移動する。

7月27日～29日 重機により畑の耕作土を除去し遺構面を確認する。

7月30日 重機で除去できない土を作業員によって取り去る。

8月5日 台風一過で発掘作業を開始する。

8月20日 住居跡や土器を人量に出土する土壌が次々と検出される。

9月8日 遺構が掘り上がり写真撮影のための清掃を行う。

9月11日 遺構の完了写真を撮影する。

9月16日 平成5年度予定分の試掘調査を行い遺跡の所在を確認する。

9月17日 ラジコンヘリコプターで空撮を行う。

10月8日 遺構大測図を作成して平成4年度分は作業完了。

平成5年5月24日 発掘器材を文化財倉庫より現場に搬入する。

5月25日 重機により畑の耕作土を除去し遺構面を確認する。

6月1日 重機で除去できない土を作業員によって取り去る。

7月8日 周溝墓の発掘を開始する。

8月4日 住居跡の発掘を開始する。

8月17日 山田報徳社より依頼された試掘調査を行い遺跡の所在を確認する。

8月19日 遺構が掘り上がり写真撮影のための清掃を行う。

8月25日 遺構の完了写真を撮影する。

8月26日 遺構大測図を作成して平成5年度の現場作業を終了。

第3章 調 査 体 制

調査指導機関 静岡県教育委員会文化課

調査実施機関 袋井市教育委員会

教 育 長 浅 井 通 男

教 育 次 長 岩 崎 保

社会教育課長 兼 子 春 治

文化財係長 古 岡 伸 夫

主任学芸員 永 井 義 博 (本調査担当者)

加 藤 理 文 松 井 明

学 芸 員 白 澤 崇 森 井 雅 彦

調 査 員 早 川 保 子

経 理 事 務 村 出 博 美

(現地調査参加者) 大庭嘉平 鈴木 武 村松和雄 杉山兼一

鈴木健蔵 伊予田寅次郎 松下静雄 山本敬 池端 清

本田八重子 大庭泰子 中島志げ子 中島あさ子

(資料整理参加者) 山下悦子 船越スミ子

第4章 調 査 方 法

今回の発掘調査は、磐田原台地より東にのびてくる支丘陵の先端の緩やかな傾斜を持つ平坦地に遺跡が立地する様相であるが、すでに西側より土石採集が開始されており急な崖となっていた。丘陵先端には地元の墓地が山田の集落を見下ろすように立地しており、遺跡と水田面の比高差は 1 m である。このため発掘器材は重機を使って山上まで運び揚げた。

果樹園、茶畑になっている現地はすでに荒れていたが、重機により耕作土を除去するとともに、発掘調査で出た土は土地所有者のご好意によりすでに土石採集の終わった崖下に投棄することができ作業が能率的に進めることができた。

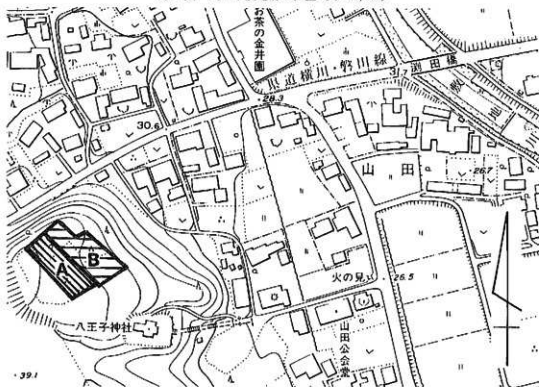
調査にはベテラン作業員の参加を得ることができたので順調に進み、現地の土層も比較的明瞭な土のため予定より速く作業を進めることができた。遺構実測も調査区全体に 1 m 方眼を設定し 1/20 の図を基本に部分的に土器等は 1/10 の図を作成した。

現場の完了写真の撮影はローリングタワーを使用するとともに、全景写真については丘陵上、で現場を見渡せる場所がないため株式会社フジヤマの協力を得てラジオコントロールの小型ヘリコプターよりの空撮を北側と東側の 2 方向より行った。

調査における遺構・遺物の写真撮影については、大型カメラ (アサヒペンタックス 6×7) 1 台と、小型カメラ (Nikon F401) 1 台で、フィルムは大型カメラ用は富士写真フィルム工業株式会社のネオパン SS を小型カメラはフジカラー 100 スーパー G フィルムを使用した。



第1図 山田中渡遺跡の位置 (1/50,000)



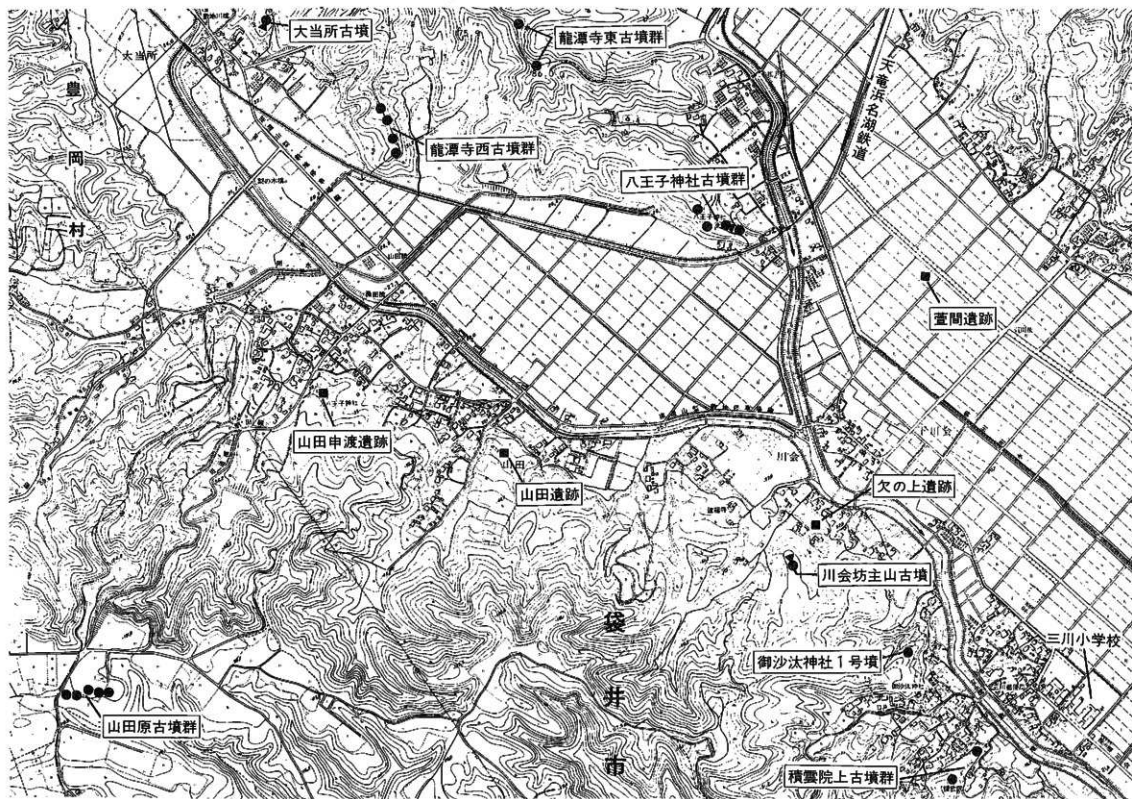
第2図 平成4年度(A)と平成5年度(B)の調査地

第5章 地理的・歴史環境

袋井市山田には、静岡県を代表する旧石器時代の遺跡として山田原Ⅱ遺跡がある。この遺跡は、昭和58年に工場建設に伴い松井一明（袋井市教育委員会学芸員）を担当者として発掘調査が行われ数々の成果を上げている。現地はその後工場の進出が中止となって荒れ果てたままになっているので調査当時を偲ぶことができる。さて、この遺跡は、天竜川下流左岸に形成された野田原台地の北端の標高120mに位置する。この台地上は磐田市寺谷遺跡等の旧石器時代の遺跡・遺物の出土することによって有名であるが、山田原Ⅱ遺跡でも礫群・石器ブロック・土藏・炭化物集中域等の遺構とナイフ形石器・削器・彫器・尖頭器等の遺物が出土している（1991山崎克己「山田原Ⅱ遺跡」『静岡県史資料編1考古2』静岡県）。

さて、この地域を代表する弥生時代の考古学的な遺物としてはやはり敷地銅鐸であろう。敷地の銅鐸は明治23年12月に敷地小字西谷の中谷289番地において山手掘りに出掛けた地元民によって2口が偶然に見えられた。この地点は今回調査した山田中渡遺跡の北1,500mの谷奥の地点であり弥生時代の遺跡として著名な蔵平遺跡との中間地点でもある（1927梅原実治『銅鐸の研究』大岡山書店）。さて、蔵平（くらのたいら）遺跡は敷地銅鐸出土地点より北へ500mの距離であり、山田中渡遺跡からでも北2kmしかない。この遺跡の立地は豊岡村敷地の永山より約5mの高さの小規模な河岸段丘上にありこの遺跡からは、弥生時代後期と考えられる鳥形土器が出土している。1978年に柴田稔氏により発掘調査が行われたところ土壌やビッドが多数検出されており集落の一部とも考えられるかもしれない（柴田稔1980『静岡県蔵平遺跡発見の鳥形土器』『考古学雑誌』第66巻1号）。小規模な集落が段丘上に存在していた可能性がある。蔵平遺跡の北1mの豊岡村下野部には新平山（しんぺいやま）遺跡がある。この遺跡は古墳時代後期の群集墳として有名であるが弥生時代～古墳時代前期・後期等の遺構・遺物も多数検出されている。このうち弥生時代後期の住居跡はA地点の山頂付近より10軒検出されており、3～4軒を同時期として数世代にわたって生活をしていただろう。遺跡からは甕・台付甕、高坏や紡錘車が出土しており村での稲作や織織り等のくらしを想定する上で重要な遺物が出土していることになる。（1992年柴田稔『新平山遺跡』豊岡村教育委員会）。なお古墳時代の住居跡はこの弥生時代の住居の系譜を引くものであると考えられている。

この地域での古式の古墳としては袋井市川会の川会坊主山古墳がある。この古墳は5世紀後半の前方後円墳で全長約30mで南北に主軸をとる。後円部は丘尾切断で、墳丘には埴輪や葺石もある。開墾作業中に鏡3面や大刀、下類が出土している（1993年白澤崇「12川会坊主山古墳」『袋井の前方後円墳』袋井市教育委員会）。なお、この時期、豊岡村では前方後円墳の大当所古墳がある。古墳時代後期には新平山遺跡A地点より2軒の住居跡が検出されているが、これらは古い段階の新平山の集落との間には隔たりがあるとされている。古墳時代後期の古墳群は袋井市では山田原Ⅱ遺跡の重複して立地する山田原古墳群や北の丘陵上の龍源寺西古墳群・龍源寺東古墳群・全長20mの小型前方後円墳を盟主とする八王子神社古墳群そしてやや南に位置する御沙汰神社1号墳・積雲院上古墳群などがある。



第3図 周辺の遺跡分布図（古墳時代）

第6章 遺跡の概要

この遺跡は丘陵上の東向きな緩斜面に集落が位置し、また眼下には小河川により形成された平地が広がっている場所である。集落跡からは竪穴住居跡9軒、溝跡、土坑、ピット、掘立柱建物跡3棟などの遺構が検出されている。

(1) 竪穴住居跡 (SH)

第1次、第2次調査の合計で9軒の住居跡が出土している。これは炉跡、または壁溝の確認できた遺構数でありピットの組み合わせではさらに軒数が増加すると考えられる。もちろん、これらの遺構には時期差がありすべてが同時期に存在していたということではない。

SH1 (第7図を参照)

山田中渡遺跡は、西側をすでに破壊されていたため、SH1が調査区内でいちばん北西に位置する遺構ということになる。この住居跡は基本的には小判形の住居跡であるが、炉のある部分が方形に窪んで、まるで炉が壁に付いた古墳時代の隅丸方形の住居跡が重複しているようにも見える。ピットも検出されているが柱穴跡と確定できるものはない。

SH2 (第7図を参照)

SH1の東側に隣接して営まれたのがSH2である。遺構はかなり削平されており住居跡としての平面形を確認することは難しいが炉跡を中心とする円形に近い形状であろう。ピットも検出されているが柱穴跡と確定できるものはない。炉跡も薄く、約2cmの厚さで燃土が残っているだけでSH1と同じくその構造等は確認できなかった。

SH4 (第8図を参照)

SH4はSH1・SH2・SH3のグループよりやや南に離れて、SH5と2軒で隣接して位置している。炉跡を中心とする円形プランの住居跡で西側には壁溝が残っている。直径約6mの小型の住居跡ながら施設はととのった遺構である。

SH5 (第8図を参照)

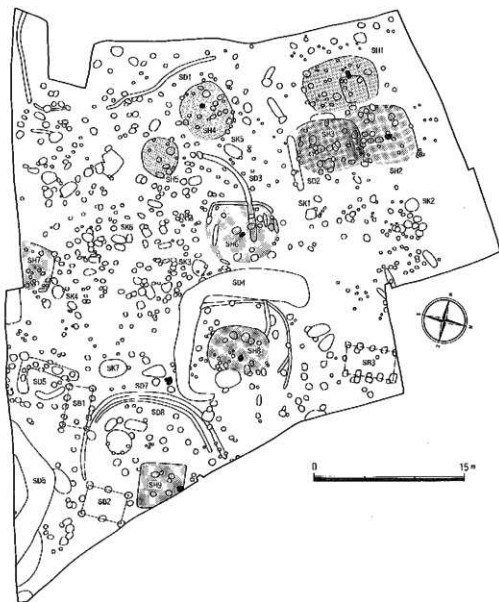
SII4の東南に隣接する円形プランの住居跡である。直径約4mと小型で貯蔵穴はあるが炉跡を持たない遺構である。

SH6 (第10図を参照)

第1次調査と第2次調査の狭間となって正確に遺構確認のできなかった住居跡で、特に第2次調査では耕作土といっしょにわずかに残った遺構面も削平されてしまい壁溝等を検出できなかった。小さな炉跡を中心に西側部分のみ隅丸方形プランらしい壁溝が残る。ピットも検出されているが柱穴跡と確定できるものはない。

SH8 (第9図を参照)

方形周溝墓の溝と考えられるSD4に囲まれるようにSII8は集落のほぼ中央のいちばん良い場所に立地している。炉跡を中央部に持つ小判形の平面プランで壁溝、柱穴も確認できる。住居跡を取り囲むように細い溝跡も検出されており水切りのための溝かもしれない。遺構確認の上ではSD4との新旧関係はわかっていない。



第4図 平成4年と平成5年の全体合成図

SH9 (第11図を参照)

隅丸方形の平面プランを持ち、北側の壁の作り付けの炉を持つ古墳時代の住居跡である。遺構の東側が調査区の外に位置するためその規模を正確に知ることはできないが推定で東西4.8m×南北4.5mで確認面からの掘り方は約30cmである。床面は図示できなかったが調査中に壁溝を確認し、柱穴も基本的に4本であると思われる。

(2) 掘立柱建物跡 (SB)

本遺構のような丘陵上の立地の場合は包含層がながされて遺構確認面がさがっているため掘立柱建物跡の検出及び時期決定はたいへんに難しいことである。また、遺跡の上が茶畑やみかん園になっている場合はさらに耕作や木の根による擾乱も受けており障害が多い。掘立柱建物跡はすべて第2次調査により検出されており、丘陵先端部に位置して建られていたことになる。ただし、第1次調査のピットも組み合わせると掘立柱建物跡の可能性を持つものもあるが、これらはやや古い時期の遺構かもしれない。

SB1 (第11図を参照)

調査区南東に位置するSB1は、八王子神社の森に近いところに、他のSB2、SB3の掘立柱建物跡とは主軸を異(直交)にしている。基本的には1間×4間(2.6m×4.3m)の総柱の建物跡である。柱穴内からは礎板、礎石等は検出されていないが、ピットの覆土からも柱を抜き取ってもちさったような痕跡は確認できなかった。この掘立柱建物跡の周囲には、関連すると思われるピットがいくつか検出されているが組み合わせは不明である。柱穴は直径50cm～70cm、深さ20cm～40cmほどで円形または楕円形の平面プランである。

SB2 (第12図を参照)

SB2はSB1のすぐ東側にその主軸を直交する形で位置する2間×2間(3m×4.3m)の掘立柱建物跡である。柱穴は直径70cm～80cm、深さ20～30cmほどで、円形の平面プランである。北東の柱穴は新しい時期の溝跡に削平されて半分以上を失っていた。小規模ながらもしっかりとしたつくりの掘立柱建物跡である。

SB3 (第12図を参照)

SB1、SB2よりやや北に離れたSB3は主軸をSB2と同方向にとる2間×4間(3m×5m)の掘立柱建物跡である。北西の柱穴跡は調査区外に位置するために一部調査はされていない。柱穴跡の平面プランは基本的に隅丸長方形で長軸60cm～90cm、短軸50～80cmほどである。柱根の位置を示す小穴が柱穴跡にあるところから、礎石・礎板を持たない可能性がある。

(3) 遺跡 (SD)

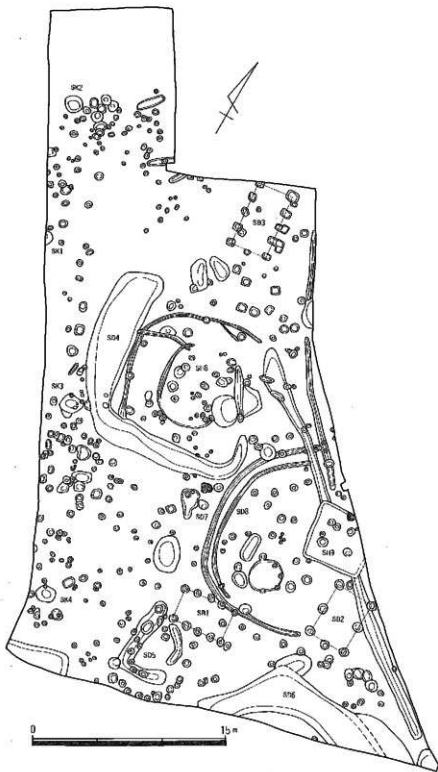
溝跡もいくつかの特徴が見られるが、SD1・SD3・SD7・SD8は丘陵斜面を流れ落ちてくる水を切り住居に雨水が流入しないための遺構であろう。またSD4・SD6はマウンドや埋葬主体部は削平されてはっきりしないが方形周溝穴の溝跡であると思われる。

(4) 土坑状遺構 (SK)

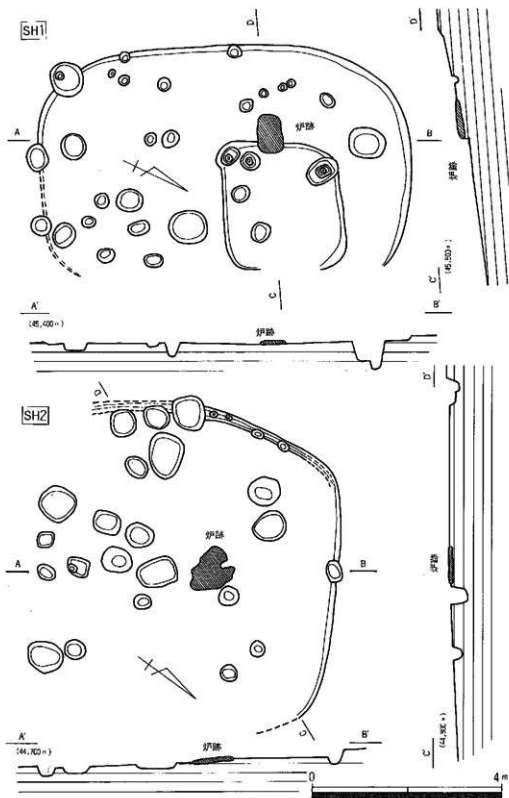
SK1～SK4の4つの大きく深い土坑状の遺構は、巨大な柱等を建てるのに都合の良い規模である。その他の土坑状遺構は土器集積遺構であり比較的浅いものである。



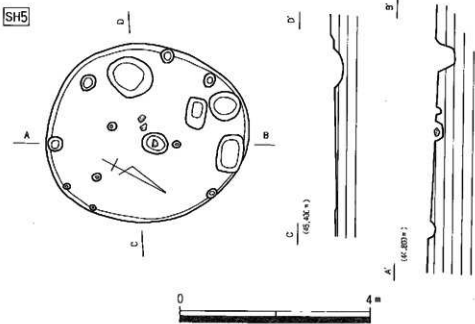
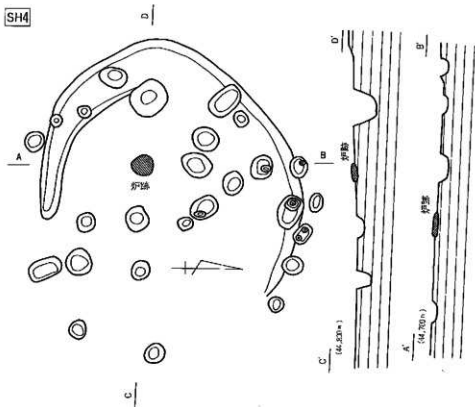
第5図 平成4年度(A)の発掘調査区



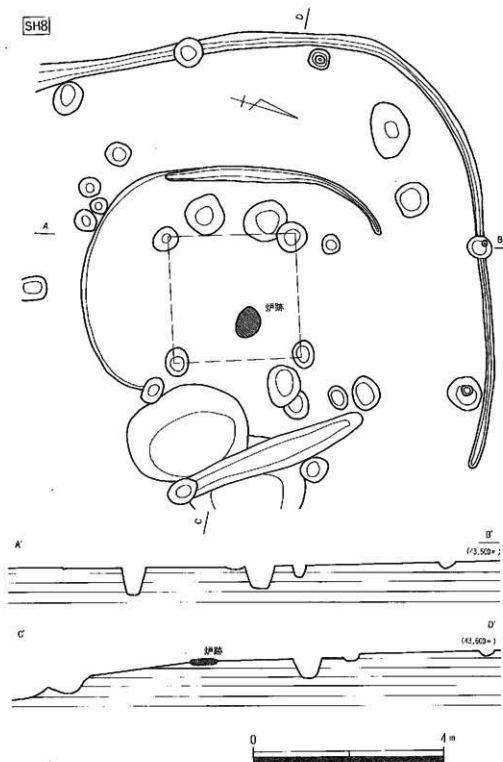
第6図 平成6年度(B)の発掘調査区



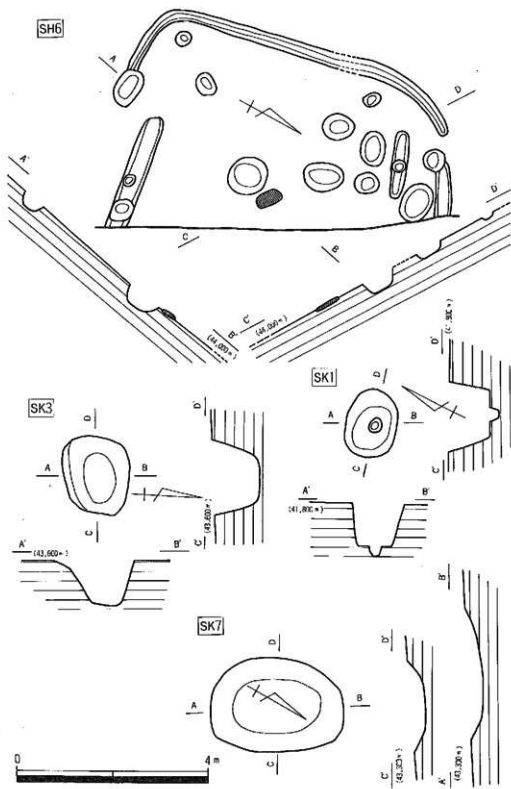
第7圖 竪穴住居跡SH1・SH2実測図



第8圖 聚穴住戸跡SH4、SH5火洲図

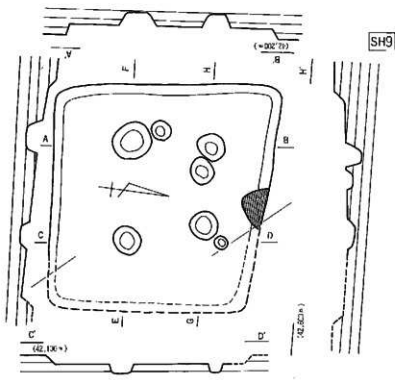
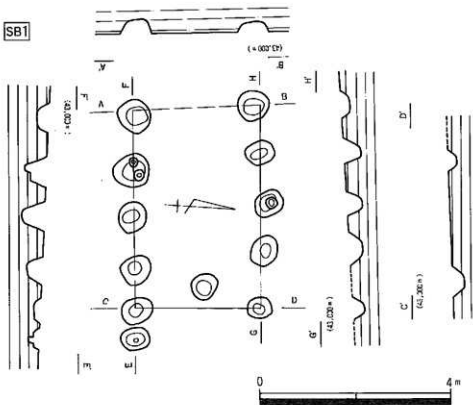


第9圖 竪穴住居跡S II 8 大測図

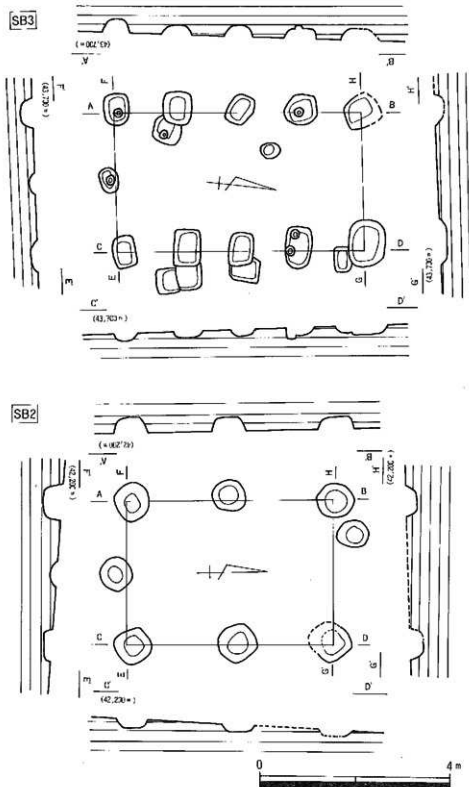


第10圖 竈穴住居跡SH6、土壇状遺構SK1・SK3・SK7の測図

SB1



第11图 掘立柱建物跡SB1、竖穴住居跡SH9実測図



第12图 柱立建物跡SB3、SB2の平面図

第7章 まとめにかえて

袋井市三川地内での発掘調査は、昭和58年の山田原Ⅱ遺跡の調査以来本件で2例目の調査である(1990山崎克巳「山田原Ⅱ遺跡」『静岡県史』資料編Ⅲ考古2)。しかし、古墳の測量調査いくつか行なわれており、昭和60年の同志社大学生による八王子神社古墳(前方後円墳)や、平成4年の関西大学生による川会坊主山古墳(前方後円墳)があるが、全体的にこの地域での考古学的な調査は少ないのが現実である。

さて最近では、山田中渡遺跡の北側の磐田郡豊岡村での考古学的な調査例が1冊にまとめられた(1993柴田稔『豊岡村史』資料編Ⅲ「考古・民族」)。これによると、豊岡村での弥生時代は数地の銅鐸を代表として、東遼江的な水神平式・丸子式・磯田式・菊川式の上器を出土する新平山遺跡や、西遼江的な欠山式土器を出土する宿平遺跡などがある。また、古墳時代前期は集落としては大桑地遺跡や多量の紡錘車を出土した新平山遺跡があり、墳墓としては大手内15号墳がある。古墳時代中期のは集落はまだ発見されていないが、墳墓は五反田1号墳や5世紀前半の円墳である谷田ヶ谷1号墳、また方墳の大手内6号墳などがある。また、前方後円墳として著名な血松塚古墳や円墳の新平山1・2号墳もこの時期である。古墳時代後期の古墳は、新林1号墳や押越古墳群、大丁内古墳群、神田1号墳、新平山古墳群など急激に増加してくる。さらに奈良時代の遺物となると蔵平遺跡などで採集することができ、平安時代には岩室庵寺から遺物が出上っている。

以上の状況より山田中渡遺跡についてまとめると次のとおりとなる。

- (1) 出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器、陶器、石器などがある。これらの遺物から山田中渡遺跡で人々が生活したのは旧石器時代、弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代を中心とした活動と考えることができる。ただし、活動の中心は弥生時代後期～古墳時代であり、旧石器時代は山田原Ⅱ遺跡との関連で数点の遺物があるのみで、奈良・平安時代の遺物も少ないのが現状である。
- (2) 遺跡の中心となる弥生時代後期～古墳時代は交通の要所となる立地や、狭いけれども豊かな平地に支えられて丘陵上に集落が営まれていた。特に中心は古墳時代であり周辺に築造された古墳群との関連も注目されることになるであろう。
- (3) 遺物については少量ながら現在整理中であるので、別の機会を得て報告したい。

最後に、今回の調査にあたり、袋井市山田の中島一夫氏、金井清春氏、中島勉氏、鈴木一平氏ほか地元の皆さんにはたいへんお世話になった。また、中島志げ子さん、中島あき子さんには発掘もお手伝いをいただいた。このように無事調査が終了したのも地元の皆さんのご協力のお陰である。文末になったが、ここに記して感謝したい。(袋井市教育委員会 永井義博)

山田申渡遺跡Ⅰ・Ⅱ

平成4・5年度緊急発掘調査報告書一

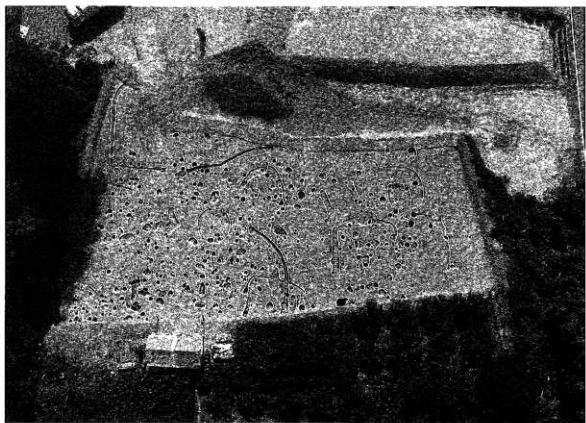
1994年3月25日

編集発行 静岡県袋井市新屋1-1-1
静岡県袋井市教育委員会◎
TEL 0538 43-2111

印刷 浜松市中沢町1-1-1
株式会社 開明堂



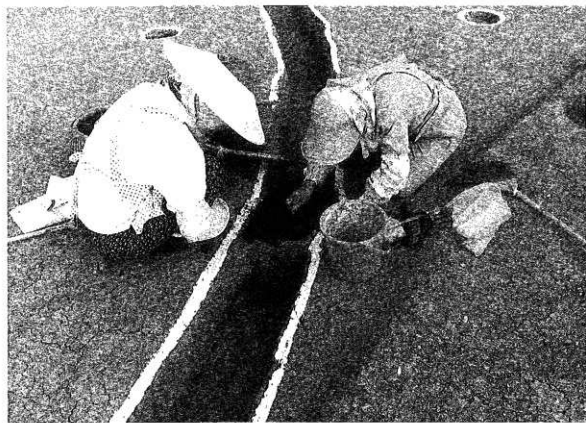
(1) 山田申渡遺跡の遠景。(平成4年度調査中。平成5年度はテントのたつ畑内。)



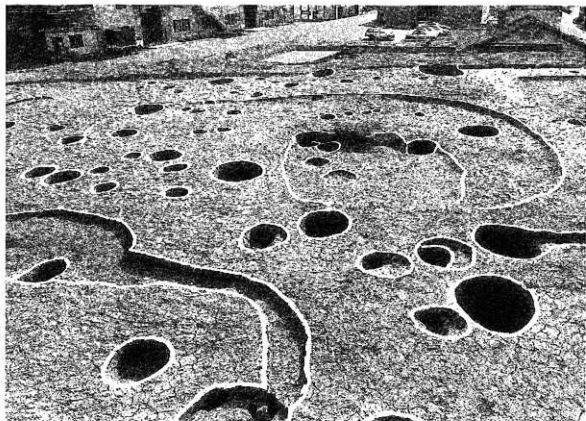
(2) 平成4年度一発掘調査区全景写真 (榎フジヤマ提供)



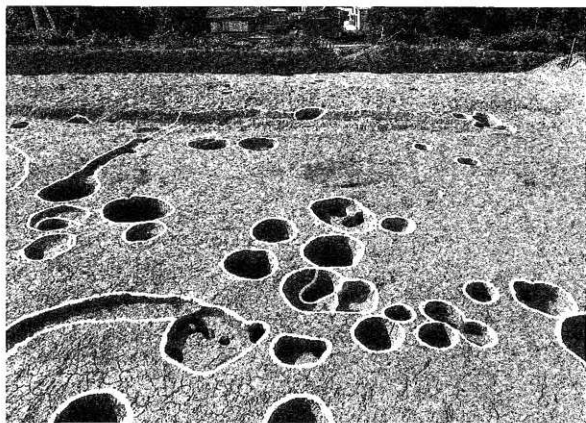
(3) 平成4年度一発掘調査区全景。(南より調査区を望む)



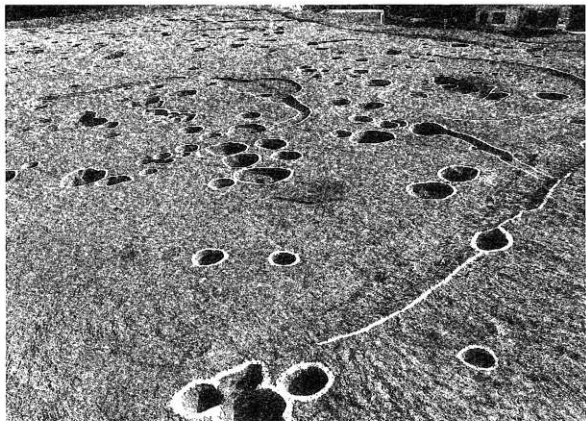
(4) 平成4年度一溝状遺構SD3の調査風景



(5) 平成1年度 - 竪穴住居跡SH1完掘写真。中央やや右に灰跡が残る。



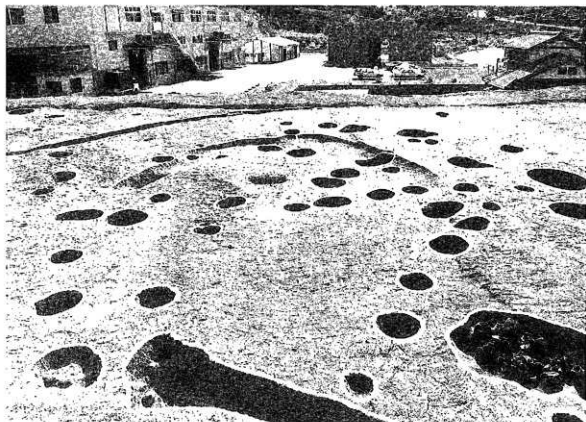
(6) 平成4年度 - 竪穴住居跡SH2完掘写真。中央に灰跡が残る。



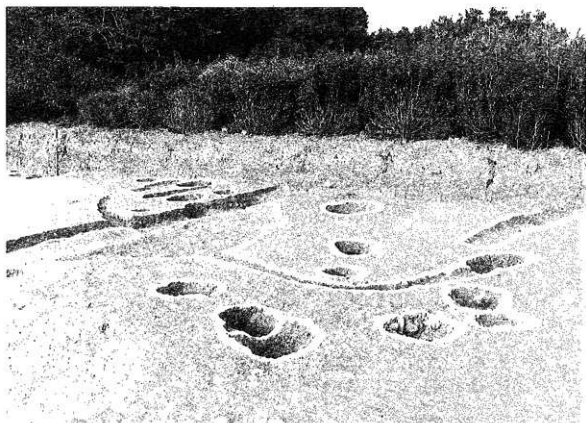
(7) 平成4年度 竪穴住居跡SH1・SH2・SH3完掘写真。



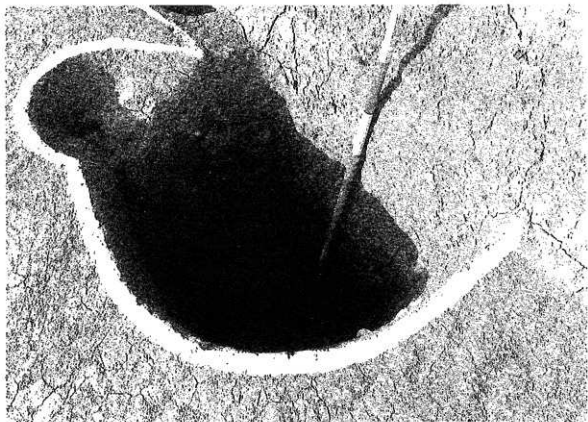
(8) 平成4年度 竪穴住居跡SH5完掘写真。この住居には貯蔵穴はあるが炉跡はない。



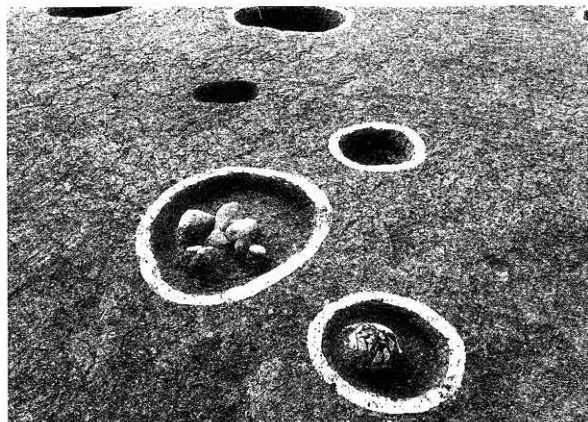
(9) 平成4年度一堅穴住居跡SH 4完掘写真。東側は壁が流れてしまって確認できない。



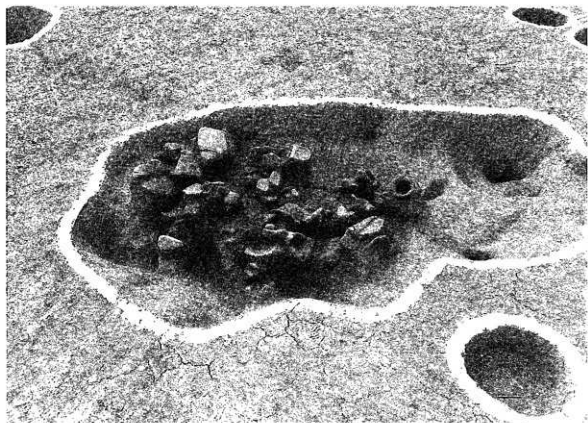
(10) 平成4年度 堅穴住居跡SH 6完掘写真。壁溝と炉跡ははっきり確認できる。



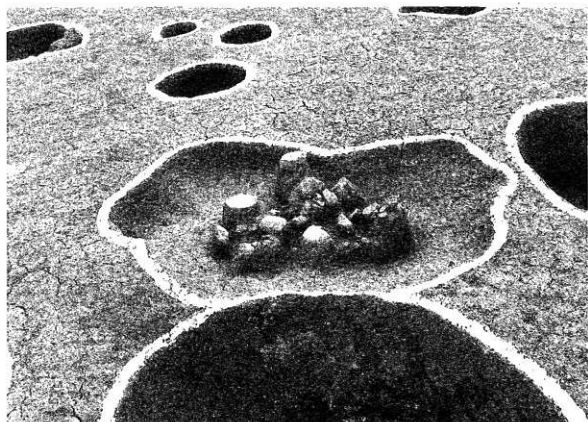
00 平成4年度—土墳状遺構SK1完掘写真。人が入ると出るのに苦労する深さである。



02 平成4年度 根固めの石を持つ柱穴跡と須恵器坏身の出土したビット。



⑬ 平成4年度一上墳状遺構SK5完掘写真。浅い遺構内には土器が充満している。



⑭ 平成4年度 土墳状遺構SK6完掘写真。遺構中央部に石と土器が出土している。



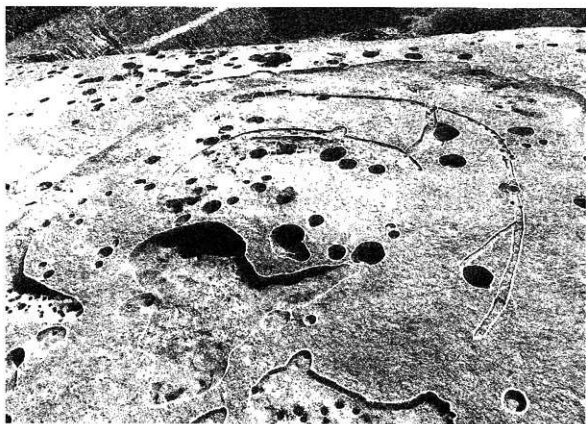
(15) 平成5年度一発掘調査区全景。(南より調査区を望む)



(16) 平成5年度一発掘調査区南側の状況。(東より調査区を望む)



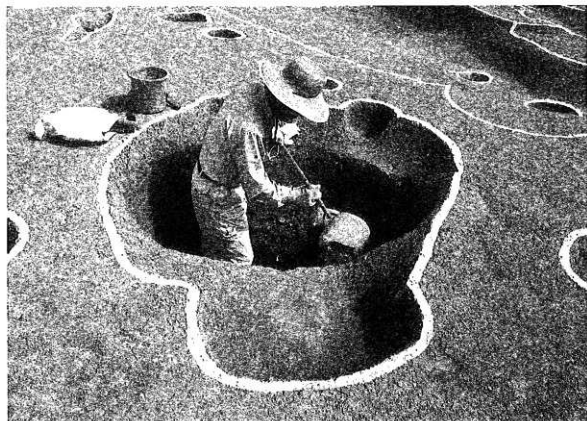
(17) 平成5年度一溝状遺構SD4と竪穴住居跡SH8の完掘状況。(南より)



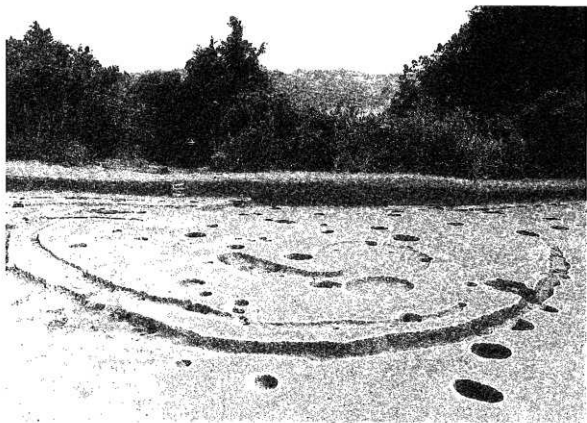
(18) 平成5年度一溝状遺構SD4と竪穴住居跡SH8の完掘状況。(東より)



19 平成5年度一溝状遺構SD4と竪穴住居跡SII8の発掘調査中の風景。



20 平成5年度一土坑状遺構SK3の調査状況写真。(西より)



20 平成5年度－溝状遺構SD7とSD8と堅穴住居跡SH9の完掘状況。(西より)



22 平成5年度－堅穴住居跡SH9の完掘状況。手前の壁に跡が見える。(北より)



03 平成5年度一掘立柱建物跡SB1の完掘状況。(西より)



04 平成5年度一掘立柱建物跡SB2の完掘状況。(南より)